

plus RESTORE® ハイドロキノン^{*1}+フラレーン^{*2} 配合 ホワイトクリーム



ナノHQクリームEX

<クリーム> 5g ¥2,000 + 税
無香料・無着色・無鉱物油

ナノHQクリーム

<クリーム> 10g ¥ 3,000 + 税 / 30g ¥ 8,000 + 税
無香料・無着色・無鉱物油

しみが気になる方に

レーザー・光治療前後に

くすみ気になる方に

使い方

- 夜の洗顔後、化粧水や美容液で肌を整えた後に使用してください。
- 適量を手に取り、気になる部分に薄く塗ります。スポット使いをする場合は、綿棒などをお使いください。



1 ハイドロキノンとは

ハイドロキノンは、日本では 2001 年の規制緩和により化粧品成分としても配合されるようになった国内外でも実績の高い成分です。メラニンの律速酵素であるチロシナーゼ活性を抑え、メラニン産生を抑制する作用が期待できる半面、赤みや刺激を感じやすい成分のため、使用に際しては十分に注意が必要です。

2 フラレーンとは

フラレーン配合の目印となるのが、サッカーボール状のマークです。肌に効果的な分量のフラレーンが配合されている証です。

強力な抗酸化作用を持つフラレーンは、肌トラブルの原因となる活性酸素を吸収・無害化する作用があります。その抗酸化力は、ビタミン C の 172 倍といわれています。

配合の利点

皮膚への刺激を緩和
ハイドロキノンが酸化すると発生するp-ベンゾキノン、皮膚刺激を誘発するといわれています。そこで抗酸化力の高いフラレーンは、酸化を防ぎp-ベンゾキノンの発生を抑制し、皮膚への刺激をやわらげます。

安定性を保つ
不安定なハイドロキノンと組み合わせることにより、ハイドロキノンの分解が抑制されます。

レーザー治療後の再黒化抑制
フラレーンにはレーザー照射後の活性酸素の発生を抑制し、早期に赤みを抑える効果が報告されているため、シミ取りレーザー後の再黒化の抑制も期待できます。

資料提供：ビタミンC60バイオリサーチ株式会社

UVA照射前
(0.4J/cm² × 5回)

ヒト色素細胞 (HMV-II)

UVA照射後

フラレーン未添加
0%

フラレーン1.0%添加
1.0%

ヒト色素細胞(HMV-II)に紫外線(UVA)を照射し、1日培養した結果、フラレーン未添加の細胞は、メラニン(黒色部分)が大量に産生され、細胞が肥大化し、樹状突起が増加しています。

一方、フラレーンを1.0%添加した細胞では、未添加の細胞に比べメラニンの産生および樹状突起が少ないことがわかります。

データ提供：東立広義大学

<参考> Q スイッチレーザーによる PIH の発生率

PIH・・・炎症後色素沈着
Post Inflammatory Hyperpigmentation

PIH発生率	
発表①	52.5% (59例中31例)
	45.0% (40例中18例)
	42.8% (21例中9例)
論文①	47.42% (194例中92例)
論文②	44.0% (165例中74例)

PIHの発生率は
平均約 **46%**

発表①：秋田浩孝 藤田保健衛生大学皮膚科 定員外準教授 第109回日本皮膚科学会総会「Q-switchedレーザーの色素斑治療ならびに合併症のリスクヘッジ」
論文①：竹内かおり「Qスイッチレーザー治療における炎症後色素沈着の発生率の検討」Aesthetic Dermatology Vol.18:77-83,2008
論文②：山田秀和、他「Qスイッチアレキサンダライトレーザーを用いた日光黒子に対する治療成績—特に炎症後色素沈着の改善の経緯」Aesthet.Dermatol.,15:58-63,2005

<参考>疾患別ハイドロキノン外用剤の改善率

	肝斑	PIH	老人性色素斑	雀卵斑	扁平母斑
論文①	64.3% (14例中9例)	53.3% (15例中8例)	37.5% (16例中6例)	66.6% (3例中2例)	
論文②	63.6% (33例中21例)	54.6% (11例中6例)	無効 (2例中なし)	40.0% (5例中2例)	25.0% (4例中1例)
論文③	78.6% (14例中11例)			無効 (3例中なし)	36.3% (11例中4例)

論文①：濱本知之ほか：院内製剤5%ハイドロキノン軟膏の使用状況とその有用性に関する調査。日本病院薬剤師会雑誌44(1495-1498)2008
論文②：濱田徳夫：皮膚漂白剤の臨床応用とその問題点。臨床皮膚科44(629-633)1990
論文③：富田 靖：メラニン合成阻害剤の基礎と臨床。Skin Surgery4(2-7)1995

一般的なハイドロキノンの副作用

- 刺激・炎症症状 (かゆみ、刺激感、紅斑)
 - ① 接触皮膚炎
 - ② ハイドロキノンの酸化によって発生するp-ベンゾキノン (ハイドロキノン酸化物) が皮膚刺激を誘発させる。
- 色素脱失
5%程度のハイドロキノンでは、脱色素斑の報告はない。^{*3}
*3 出典：ロドデノール誘発性脱色素斑 医療者(皮膚科医)向けの診療の手續き 公益社団法人 日本皮膚科学会
- 外因性組織褐変症
黒人に多く発症する。アジア人でも発症が報告されており、今後日本での発症にも注意を払う必要がある。^{*4}
*4 川田 暁：ハイドロキノンの再評価 Aesthetic Dermatology Vol25:79-83, 2015

<販売にあたってのお願い>

左記副作用のリスクがあるため、院内での対面販売のみ行っている商品です。販売にあたっては適宜医師による診断・指導をお願いします。

- ・適応疾患の見定め
- ・使用目的、効果とリスク説明
- ・皮膚状態の観察 (副作用の発症の有無など)
- ・使用期間 (使用中止の判断など)

ご使用上の注意 ハイドロキノンの特性上、以下の点についてご注意ください

- ・開封後変色 (茶色) する恐れがあります
冷暗所なるべく空気に触れないよう保管し、早めに使い切るようにしてください。(目安：約1~1.5カ月)
- ・変色した製品はご使用にならないでください
変色した製品を使用した場合、肌への刺激が強くなり症状を悪化させる恐れがあります。新しい製品をお求めください。
- ・赤みや刺激を感じやすい成分です
初めてのご使用時はパッチテストをおすすめします。
- ・紫外線の影響を受けやすい成分です
日中の外出時には必ず日焼け止めをご使用ください。夜のみの使用をおすすめします。



ナノHQクリームEX 全成分

水、トリ(カプリル酸/カプリン酸)グリセリル、BG、ジカプリン酸ネオペンチルグリコール、ハイドロキノン、メトワフォーム油、DPG、ステアリン酸グリセリル(SE)、ベンチレンジリコール、水添ヤシ油、アラキシルアルコール、グリセリン、ジメチコン、シア脂、ミツロウ、ペヘニルアルコール、水添パーム核油、(アクリロイルジメチルタウリンアンモニウム/VP)コポリマー、アキルグルコシド、水添パーム油、ヒドロ硫酸 Na、クエン酸 Na、アスコルビン酸、酢酸トコフェロール、キサンタンガム、グリチルリチン酸 2K、PVP、プロピルパラベン、EDTA-3Na、メチルパラベン、パルミチン酸レチノール、コロン油、フラレーン、エタノール、リン脂質、テトラペプチド-30



ナノHQクリーム 10g / 30g 全成分

水、トリ(カプリル酸/カプリン酸)グリセリル、BG、ジカプリン酸ネオペンチルグリコール、メトワフォーム油、DPG、ステアリン酸グリセリル(SE)、ベンチレンジリコール、ハイドロキノン、水添ヤシ油、アラキシルアルコール、グリセリン、ジメチコン、シア脂、ミツロウ、ペヘニルアルコール、水添パーム核油、(アクリロイルジメチルタウリンアンモニウム/VP)コポリマー、アキルグルコシド、水添パーム油、ヒドロ硫酸 Na、アスコルビン酸、酢酸トコフェロール、キサンタンガム、グリチルリチン酸 2K、PVP、プロピルパラベン、EDTA-3Na、メチルパラベン、パルミチン酸レチノール、コロン油、フラレーン、エタノール、リン脂質、テトラペプチド-30

MADE IN JAPAN

※1 整肌成分として ※2 製品の抗酸化剤 ラジカルスポンジとして